



村川 それでは第三部を始めさせていただきます。まず、この国際プロジェクトに参加されている先生方でフロアの方にいらっしゃる先生方が何人かいらっしゃいますので、その先生方から少しお話を頂ければと思います。では、小田先生の方から。

小田 皆さん、こんにちは。札幌から参りました小田と申します。今日はお招きいただきありがとうございます。村川さん、村本さん、本当に準備が大変なところをありがとうございました。今日のテーマの平和教育に関して私は、北海道大学で「人類学と平和」という授業をやっています。昨年、村本さんのプロジェクトにまぜていただいて、南京を訪ねました。セミナーにも参加したんですが、そこで得たことをどう大学の授業に生かしたのかということを経験も交えて少しだけお話ししたいと思います。

セミナーで夏淑琴さんという生存者の方のお話を伺いました。やはり当事者のお話を直接聞くということはとても心に響いてきて、「南京事件」、「南京大虐殺」という言葉だけで理解していたものをもっと身近に感じまし

た。夏さんの表情とか、声、お話などが、私の中でまだ生きている感じがします。日本に帰ってから開講した昨年度の二学期の授業「人類学と平和」では、南京事件のことで3コマ分取りました。1コマ目に民放のドキュメンタリーを見せました。日本人兵士の陣中日記の中で、南京虐殺のことを書いたものがいくつか残っているんです。それを集めて、記録として編集して出版されている福島の間の方がいらっしゃるんですが、その方に取材したドキュメンタリーです。これは加害者側が残している証拠です。

次に多面的に歴史を見てもらうために今度は被害者側ということで、夏淑琴さんが南京で証言している映像を見せました。南京事件の犠牲を数字で語るのではなく、具体的な名前と顔のある人の犠牲として理解するためです。夏さんは、今でも日本兵に刺された傷が痛むと語ります。その背景にどういう物語があるのかを学生に伝える。具体的な証言には聴く側に、他者に対する痛みを活性化するというか、芽生えさせる、そういう力があるだろうと思います。それと同時に南京事件の歴史的な背景も説明しました。三コマ目に紫金草合唱団の方に札幌に来ていただいて、授業内コンサートをしました。あの時はどうもありがとうございました。今日は70人ほどいらっしゃったということですが、授業では40人ほどのメンバーが普段の教室の中で歌っていただいたので、非常に窮屈な思いをして歌うことになったんじゃないかと、あの時のことを思うと恐縮してしまうんですが、私も隣や向いの教室に音が漏れないように防音用の毛布をドアに貼り付けたりして聞いていたので、あまりじっくり聞く余裕がありませんでした。しかし今日は一聴衆として、皆さんの力強い歌声にとっても感動いたしました。さて授業の後で、学生に感想文を書いてもらったんですが、南京事件の理解が変わったという学生がいました。また、中国人の被害に痛みを感じる日本兵が登場することで、共感しやすくなったとの感想もありました。

そこで、平和教育におけるアート、芸術、音楽、歌の力を実感しました。それから花が人を結びつける力。それとともに大門さんが書かれた絵本。紫金草のことを調べて行く中で山口誠太郎さんという薬学者の存在も知りました。この方は東大の薬学科を出たときに卒業旅行で中国を訪ねておられるんですね。中国人の留学生に案内されて回ったということです。その

時に南京の街並みの美しさに心をひかれ、それが印象に残ったんだと。そして、南京にある紫金山が故郷の茨城県の石岡市から見える筑波山に似ていて非常に親近感を持ったのだということです。そして1939年に陸軍少将として南京に行くんですが、その時に見た日本軍の略奪と破壊によって荒廃した南京の姿を見て衝撃を受けたそうです。その背景を調べて感じたのは、僕は南京の虐殺に関する歴史についてはある程度調べて分かっているつもりでいたんですが、それより前の美しい古都としての南京を知っているだろうかと自分に問いかけました。歴史を見つめる時に否定的な歴史だけではなくて、その周りに広がっているような美しく善い側面、そういうところにも視野を広げて見ていく必要があることに気づかされました。

村川 ありがとうございます。続きまして、金丸先生お願いします。

金丸 どうも先生方、ありがとうございます。経済学部で経済史を教えている金丸と申します。30年ぐらい勉強できてしまっているので、歴史あることというのが当たり前のようになってしまっていて、年に何本か論文を書いて、これでいいやなんて率直に言って思っていた時期があったんですが、たまたま南京大虐殺の60年のシンポジウムがあって台湾に行って、その時も同僚の文学部の北村先生と一緒にいったんですが、まともに議論ができないだろうということで、経済史の論文でくせ球を投げて、報告したらやはり予想以上に批判を受けまして、二度と戦争研究には手を出さまいと思っはいたんです。

ところが、村本先生のプロジェクトで昨年南京に行きまして、根源的に感じたことは何か。それはね、結局私が、私という人格が私という時間を使って、人の心に関わる研究をやっているならば、これは本当に大きな気付きだと思うんですが、ただ単に科学性であるとか、科学性の背後にある歴史学の場合であれば、検証可能かどうか、そして他の人が反証することが可能かどうか、こういった問題、これは当然、追求していかなければならないんです。しかしながら私たちが普段、何げなく使っている言葉、真理ですとか事実とか良く使いますよね。客観的に分析するとか。

こういった言葉とか概念、使い方とか使われ方、それを原書に戻って自分で考えなければいけないんじゃないか。これは同じようにある出来事に関する叙述、評価のスタイル、これについてもゆっくり検証していかなければいけないと思います。

また、これは三番目の気付きなのですが、昨年南京で普段僕らは言語を使って自分の考えを表現をしますけれども、そうじゃないですね。体を使って、本日の場合ですと歌を使って表現をしたりとか、言語化ないしは可視化できない部分ということ。これは僕らは最初の前提として持っているんだということ。これを明示した上で自分の仕事を進めていきたい。これから先に、一つはテキスト、一番大事なテキスト、目に見えるもの。しかし、このテキストに込められた文脈というのは目に見えないものも多いかもしれない。こちら辺をどのようにして、上手く折り合いを付けて自分の仕事を進めていくかというのは、今回のプロジェクトに参加させていただいて、色んな方、他分野の方と触れ合っていく上で今では本当に実感している課題であり、感想であると思います。歴史学は僕は最後には言葉の学問、ロゴスの学問だと思っています。しかし、やはり表現できない部分がある。大きな限界を認めて、自分の弱さを認めてそこから出発すれば、我々の学問はもう少し強くなるんじゃないかと思います。どうもありがとうございました。

村川 ありがとうございました。それでは南京からいらっしゃってください
います陶先生、一言お願いします。

陶 私は陶琳瑾と申します。私は南京、現在の南京師範大学でカウンセラー関係の仕事を、研究職でもありますけれども、教師もしております。2009年にはじめて村本先生に南京で会いました。南京プロジェクトをきっかけで会いましたけれども2009年の当時には、私はまだ博士の研究に忙しかった時期なのですが、その時にスタッフも少なくて村本先生が一人で頑張っている姿を見て、とても感動しました。そして、その時に不思議に思っていたことなのですが、こんなに少ない人数でプロジェクト、南京プログラ

ムが歩いていけるのか疑問に思っていました。

今回、日本に来まして、ここに来られた先生たちはいろんな分野の先生方がおられて、歴史とか哲学とか文学とか、みんなそれぞれの分野でここに集まって、同じテーマで語っている、同じ関心を持っています。ここにいらっしゃる先生方はみんなまじめに厳しくというか、謹んで研究されているなと思っています。南京師範大学の張連紅先生が昨日仰っていた一つの言葉ですが、学術理性、学術的に理性的に考えるということだと思うんですが、その言葉がとても印象的かったです。

カウンセラー、カウンセリングについての仕事をしていますので、私も自分の仕事においてもなるべく中立という立場に立たなければならないという意識を持っています。なので、張連紅先生の学術について冷静というか、理性を持って学術をすることということに共感を感じました。特に私は南京関係のプロジェクトに、ワークショップに参加するときに、人間ですので、感情を持って参加することを避けられませんでした。

ですので、ワークショップの方式でもそうですが、芸術の方法を使って例えばドラマを使って、両面のバランスを取って、悪い所も良くない一面も良い一面もバランス良く表現しだすことがとても重要なことではないかと思っています。今回、今日も、こちらのシンポジウムに参加する前に平和ミュージアムの地下一階の展示を見に行きましたけれども、そこで展示を見て同じく表現というか、左でもなく右でもなく極端的な立場でなく、加害者の立場でもなく、被害者の立場でもなくバランスよく展示されているなと思いました。

ちょっと思いましたのは、コミュニケーションが通じない一番大きな問題は同じ情報を共有できていないからだと思います。より良いコミュニケーションを取るためには同じ情報を共有することが最初にやらなければならないことじゃないかと思っています。

今回日本に参りまして、紫金草がこのようなきれいな姿で日本で咲いていることに非常に感動を感じましたけれども、今回の南京プロジェクトも紫金草のように日本の土地でますますきれいに咲いていくことを願っております。

村川 ありがとうございます。それでは、時間が押しているんですが、張先生とアルマンド先生、吉先生一言だけ。

吉 ありがとうございます。応用人間科学研究科の吉と申します。実は立命館に移ってきたのはこの4月で、それまで12年間広島で仕事をしておりました。広島というと、皆さん、さっきも話の中で沢山出てきたんですが、私も広島で12年間心理臨床をやっておりまして、その中で沢山の被爆者と出会っています。彼らはとても力強く生き抜かれてきていて何が支えだったのかというのがずっと私の中で疑問で、ただし彼らがカウンセリングの中での私との面接の中では、自分が被爆した体験を語らないんですね。その語りがどういうものなのか、私が専門としている表現性心理療法からは、描画とか語りとかを扱っていますが、その中でちらっと見えたのが水に対するイメージが違うんですね。私たちは水というと、命とか清めるというイメージがあるんだけど、広島の方々の水に対するイメージは微妙で、あの時の体験、つまり水を飲んだら死ぬという体験と深くつながっているのではないかと思うんですね。

今回の南京のプロジェクトと初めて出会ったのは2009年ですね。報告書を読ませていただいたのがきっかけで関わらせていただいているんですが、中国人である私がこの立命館で平和教育と南京というプロジェクトをどのようにやっていくのかということを常に自分に問いかけて、どういう風にやっていくのかというのが私の中の課題であり、皆さんの力を借りながら行動していきたいと思っています。

村川 それでは張先生とアルマンド先生の方から皆さんのお話を聞いて感じられたことを、あるいはどなたかに質問とかございましたら。

張 先ほど先生たちの話をいただきまして、とても色々考えさせられました。歴史によるトラウマについて、歴史の研究者でも、先生でも、哲学の先生でも皆同じ目標を持っている、同じ目標を目指してやっていると思います。例えば先ほど金丸先生は、歴史学の研究の中で客観性が重要だとおっ

しゃっていました。それに対して先ほどの合唱団の表現の方法としては、どちらかという主観的、もっとやわらかいやり方でやられていると思います。アルマンド先生のやり方だとドラマを使われておりまして、みんなそれぞれやり方は違いますが、共通としている目標は、トラウマを共有することですね。

それでも歴史学の研究者の中でも、もっと客観性について深く考えている方も、そういう認識ができている方は少ないと思いますし、合唱団の方も多分、他の合唱団と比べるとそんなに観客の人数は多くないかもしれないですね。私達のワークショップ、南京プロジェクトのワークショップもできることに限界があります。とても大きなチャレンジですが、私たちに共通する認識を社会に認めてもらうことが、私達の大きな目標ではないかと思います。ありがとうございます。

アルマンド 合唱にとっても感動いたしました。日本の本当に遠い所から集まってきた、このような美しいイベントを生み出してくださった皆様に感動しています。私にとっては、これは深い哀しみの表現というふうにとらえています。そして、日本の意識というものの現れ、表現ではないかと思っています。

もう一つ私の心にある疑問が浮かび上がってきました。それは日本と中国の問題というだけではなくて、他の国をも含めた問題を包含しているのではないかと。これはコレクティブ、集合的な謝罪ではないかと思っています。そして、この私たちが済まなく思う謝罪の気持ちというのはいつか償われる、報われることがあるのかなという風に思っています。私はある意味で外部のものなので、正確に皆さんの話されている文脈を理解しているかどうかわかりませんが、皆さんの今の合唱がもしかしたら集合的な意味で、直接的ではないにしても間接的な謝罪として成り立っているのかなとそういった感想を持ちました。

長い話を短くすると、これは言葉で言えないような経験についてのとても芸術的な表現ではないかと思っています。そしてこれはとても力強いもので、政治的な組織的なものを動かすものではないかと考えています。

大門 絵本の方の英語訳をアルマンド先生にお渡ししましたが、「紫金草物語」の中国語訳は張先生にお渡ししました。中国語訳はできてはいるんですが、英語訳はできていません。実は3月にニューヨーク・リンカーンセンターで演奏するということが決まっています。国連の会議室かどこかで公演することになっていますので、一部を訳す機会があるかと思います。もちろん謝罪の気持ちを込めた歌詞になっています。

村川 すみません。後十分ほどしか残り時間がないのですが、中村先生、加國先生、何かございますか。

中村 もうちょっと議論したいなと思っていたことがあって、加害と被害の意識の連続性とか、入れ子になっている構造的とかその多層性を私達は日常的に問われていると思うんですね。例えばアメリカ軍の兵士が死体を冒瀆していますよね。ああいうことが日常茶飯事になってきています。ああいうことに対して私の意識がどう反応するかとか、それから後、イラクに行くという高校生がいて、自己責任だと言われました。あれはたまたまうちの付属の学生だったので意識があるんですが、あれをどう私が思ったかとか、全部問われているなど、つまり連続しているなどということなんですね。ですから、南京に思いをはせるということと、今現在起こっている暴力事件との連続性を私は考え続けたいと思っていくつか問題提起をさせていただいています。

流されているという意識を私は持っていますし、先ほどの性犯罪者のあれに対して皆さんどう反応されましたか。なかなか難しいですよ。自分の隣の家にあれが貼られたらどうかとか、こういうことの結論はないんです。そこの連続性を是非考え続けながら、それは学問でもいいし、アートでもいいし、対話でもいいし、何でもいいんです。そんなことを考え続けたいなというのが残存、意識の中に残っています。そういうことの自覚と、反省と何らかのできることをし続けることでしか、もし平和の文化というのがあってそれに平和教育が貢献すべきだとするならば、そこの中の憎悪の文化の反転をどうするかという方策をいろんな手段を通じて探りつづけ

たいなと思うんですね。社会病理学者なものですから、どうしても社会の病理性と、その中で個人の傷つきを同時にどう回復できるかということに関心があるものですから、それを引き続き深めていきたいなと思っているとあります。今日はどうもありがとうございました。

加國 今日は本当にどうもありがとうございました。皆様のお話を伺いながら平和教育ということで、今教育の現場が大きな焦点になってきていると思います。今日の紫金草合唱団の大門さんのお話の中で中国が嫌いと言手挙げる子が多いという、非常に悲しい現象が起こっていると思います。石原都知事や河村市長の発言など、人の上に立つ政治家がそういう発言をする、そのもとにある教育システムの中で子どもたちが今日、中村先生がおっしゃったように暴力を学習していつているのではないかと思えてくるわけです。そうしますと、一番板挟みになるのは学校の先生たちではないのかと思います。大阪でも君が代を歌っているか口元チェックをするということが起こっているわけですが、私たちのミュージアムも将来教師になる人たちのために何か教育プログラムを作れないかなとこの前から言っているところなんです。今日の村本先生の平和教育プログラムを学校教育に関わる方たちに実施すると言いますか、ボルカス先生のHWHプログラムのような実践を将来学校教育に関わる人たちや教育委員会に入る人たちに実践すると非常に意義があるんじゃないかと感じました。

村川 ありがとうございました。おそらくフロアにおられる皆様の中でも色々なことを感じて考えておられる方もおられると思うので、感想でも質問でも結構です。ただしおひとり1分間だけでまとめてお願いできればと思います。いらっしやいませんか。それでは奥本先生、もしよろしければ一言。

奥本 まさか名前を呼ばれると思ってなくて、ドギマギしております。奥本京子と申します。ありがとうございます。今回、すごく楽しみにまいりまして、今度ワークショップにも参加させていただくことにもなっています。平和学をやっています、特に芸術アプローチを考えています。紛争転換

の分野の中で問題解決をする過程の中で芸術的なアプローチをミクロのレベル、マクロのレベル、様々なレベルでどのように展開できるかということを試行錯誤しながら考えているところですので、今日は本当に多岐にわたる様々な側面から色んなお話を聞かせていただいて、大変勉強になりましたし、これから先どのように展開していくか楽しみに、ちょっと月並みな感想なのですが、時間のこともありますので、やめておきます。ありがとうございました。

村川 他にいらっしゃいますか。お願いします。

春日井 立命館の文学部と応用人間科学研究科の春日井と申します。専門は臨床教育学ですので、加國先生が今後教育の問題が大きくなるのではないかとということで共感しています。ゼミ生で広島出身の女子学生がいますが、平和教育で広島の話は聞きたくないというんです。泣くんです。つまり、平和教育、平和学習がある国にとっては平和に目覚め、平和を大事にするという心を育てるという効果がある。ある国にとっては、もう二度とその話はしてほしくない、つらいんだという風に反応する。教育の現場で良かれと思ってやっていることにその両面の反応があることは事実なんです。これをどうとらえていくのか。私はこの2年間、その子と付き合いながら、しかし留学に行ったり、日米の教育比較をしたりしながら、しかしその子の持っている感性の豊かさや鋭さがそのことが平和構築の力になっていくのではないかなと、その子の持っている感性の豊かさや鋭さをどういう風にして生かす教育をどのようにしていくのかと問い返されているように思うんですね。ですからそういう感じ方が駄目だとか、確かに発達段階に適した教材の提示の仕方という問題はあるにしてもね、僕は逆にそこを否定せずにそこをどう教育の中に生かしていくのかというそういう視点がむしろ大事ではないかなと思っています。ちょっとあの、そんなことを聞いて改めて思った次第です。横に一緒にいながら考えた2年間です。そういう子どもたちと一緒にい続けながら何ができるかなと思ひながら、い続ける援助者の存在というのも大事かなと思っています。以上です。

村川 ありがとうございます。それでは他に、もしよかったらホンさん。わざわざ韓国から来てくださって、南京にも何度も一緒に行かれているので一言。

ホン・リナ こんにちは。韓国から来ましたホン・リナと申します。私は立命館大学を卒業し、韓国学中国語研究院というところで修士課程を勉強中です。私も昨年での南京でのワークショップそれから2009年、2007年でしたっけ、2007年の立命館でのワークショップにも参加させていただいて、このプロジェクトにはすごく思いがあるというのと、後はなかなか日々忙しい中で忘れがちな南京への思いだったり、記憶をこの会議で思い起こせたような気がします。私は韓国で在日朝鮮人として勉強していますが、このワークショップでの取り組みは日中での葛藤関係を考える上では重要な役割があると思いますが、その日中だけにとどまることなく、韓国と日本、朝鮮半島と日本、それから東アジアと日本の和解のためにこれからおそらく役割を担っていける可能性があるとは私は信じて、関心を持ち続けているんですが、さらにステップアップしていく可能性、必要性があると思うんですね。ですから、もしよろしければ、今日の先生方の皆さまにそれについて何かお考えがあればお聞きしたいなと思います。ありがとうございました。

村川 ありがとうございます。それでは、残り5分なので、プロジェクトのリーダーである村本先生の方からまとめをお願いします。

村本 みなさま、今日は本当にありがとうございました。トラウマの臨床を20数年やってきて思うことは、臨床心理士としてトラウマに関わっていると、狭い部屋で向き合いながら、段々と内にこもって行って、自分をどんどん追い詰めていく側面があるんですね。そこから、ベクトルを転換して外に向けて動くというか、南京に行ったりドイツに行ったりする中で開けていくものがあり、出会いがあったり、つながりができたりということを経験してきました。

先ほど陶さんが2009年の時に、私が一人でがんばっていたけれど、こんな小さな力で大丈夫かしらと思ったという話がありましたが、本当にいろんなプロセスを経て、2011年、それから今日と、一緒に考えていく人たちがたくさん集まってきてくれて、こういう場が実現したことを嬉しく思います。初めに「合流」という言葉を使いましたが、ここに一つのフォーラムができて、私も一つの湧水だし、それぞれの先生方もそれぞれの道の中からここにたどり着いてきて、今、ここで、時間を共有しているわけです。

今朝まではここからどうやっていこうかなと思っていたんですが、今は頭の中にいろんなアイデアが沸いてきて、また視野が開けてきた感じがするんです。例えばミュージアムの展示に関しても、私は加害に向き合ってきた国としてドイツのことを調べ、その中で小田さんとも知り合っているのですが、ホロコーストミュージアムをいろいろ見まして、それぞれに个性的で展示の仕方、教育の仕方についても考えていることがありますので、そのことをもっとやっていけるかなと思ったり。

とりあえず私達の計画は、ここからもっとファシリテーターを増やしていこうということで、今はアルマンドを中心にやっているのですが、それではとても足りないから、このHWHという手法を使える人をアジアに広げて行って、ワークショップを自分たちの力でできるようにと、この後、一週間みっちりトレーニングの機会を作るんですね。中国からもソウルからも駆けつけてきてくれて、少しずつこのHWHのファシリテーションをできる人が増えてきて、色んな形でこのグループを応用して行けたらいいなと思っています。

今日の主催をさせてもらった応用人間科学研究科というのは、連携と融合ということで多領域を超えて一緒にやっていく、それから実践と研究と教育を連環させていくことを目指してきたんですが、まだまだ不十分なところがありまして、今日のテーマでも、臨床家として小さな部屋、小さな社会でやってきたことを、こういう形で、研究、そして教育ということで循環させていく一つの手掛かりになるといいなと思います。

それから、最後になりましたが紫金草の合唱団の方たちにもこんな形で

出会えてありがたく思います。歌を聞きながら、お一人お一人のここにたどり着いて活動している思いの中に多分、戦争の頃に子どもだった方、その直後に生まれた方、それぞれが自分の親の体験であるとか、自分が子どもの頃に肌身で感じたことの思いを力にして、それぞれの歌声があるのかなと思って、お一人お一人の顔を見ながら、胸が熱くなりました。そんなお話をお一つお一つ聴けるといいなと思いました。もう時間ですね。

村川 はい。ありがとうございました。本当に長い時間、様々な意見をいただき、刺激的な、多様な見方、経験ということを学ばせていただきました。この国際シンポジウムのためにわざわざ中国から来ていただいた張先生、陶先生、それからアメリカから来ていただいたアルマンド先生にもう一度拍手でお礼を申し上げたいと思います。それから、日本の全国から集まってきたいただきました、紫金草合唱団の皆様にも本当にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。この国際シンポジウムはこれで閉会とさせていただきますが、このプロジェクトはこれからも継続していくことになると思います。皆様と一緒にこれからも続けていきたいと思いません。どうもありがとうございました。